

風に立つライオンを めざす者たちへ

- 人間の仕事 -

堂園 晴彦

人間の仕事

英語版の朝日新聞に「風に立つライオン」の記事が掲載されると、神戸在住のインド人アルジュン・グプタさんから電話があり、予想もなかった援助の申し出がありました。

自分の妻と娘がカルカッタに住んでいる。マザーテレサの施設の近くなので、ぜひホームステイに利用して欲しいとおっしゃるのです。偶然友人がマザーテレサの施設に行くことになり、早速宿泊をお願いしました。すると、空港まで奥様と娘さんがわざわざ出迎えてくださり、さらに大変温かいおもてなしを受けたそうです。アルジュンさんの家庭は、決して私たちが想像するようなインドの富裕層ではなく、ごく普通のご家庭だったそうです。

友人からその報告を受け、すぐに感謝の電話を神戸のアルジュンさんに入れました。そして、なぜ見ず知らずの私たちにそのように親切にしてくださるのかと質問しました。するとアルジュンさんは、「人にはそれぞれ仕事があります。会社の仕事、父親の仕事、母親の仕事、子供の仕事。堂園さんたちがしようとしている仕事は人間の仕事だから、お手伝いをしたいのです」と、話してくださいました。「人間の仕事」という言葉は初めて聞きました。人が人のためにする仕事を人間の仕事というのでしょうか。人の成長を育むような仕事をいうのでしょうか。とにかく、衝撃的な言葉でした。私たちが一番忘れていた仕事が「人間の仕事」かもしれません。「風に立つライオン」の歌詞の中に、

- やはり僕たちの国は残念だけれど何か

大切な処で道を間違えたようですね

とありますが、仕事の向こうに常に人の幸福を見据えていることが本当の仕事なのに、最近の日本人はお金だけを目的に仕事をするようになってしまったようです。アルジュンさんは、「医学生は私の家に泊まればよい。ホテルに泊まるより地元の人の家に泊まったほうが、よりインドを理解できるし、そのほうがお金もかからない」と、おっしゃってくださいました。今回は既に宿泊先が決まっていたので、次の旅からはぜひアルジュンさんのご自宅を利用させていただきたいと考えています。

主人公は100年後の医療改革

「風に立つライオン」に参加した学生の応募動機を読んだり、彼ら

堂園 晴彦 / どうぞの・はるひこ

1952年鹿児島県生まれ。慈恵医大卒業後国立がんセンターレジデント、米国スローン・ケッティング癌研究所短期留学、慈恵医大産婦人科講師、鹿児島大学産婦人科講師を経て、96年「北風に飛んで旅をしている旅人にそっとフロックコートをかけてあげよう」という思想を医療の中で実現するために「堂園メディカルハウス」を設立。理念は「手の温もりとおもてなしのシャワー」。

現在錦ヶ丘幼稚園・保育園理事長。NPO法人「風に立つライオン」理事長。

学生時代実験演劇室「天井桟敷」に在籍。自称「ホラリスト」。

に会うと、「青年よ大志を抱け、すると中年も大志を抱く」というような気持ちにさせられます。理想に燃え医学部へ入学したものの、日常生活に埋没してしまい、理想は遠くへ行ってしまった。そのような時、風に立つライオンの記事を読み、忘れかけていた何かを思い出したようです。

今回8名の学生をマザーテレサの施設に派遣することができました。選考方法は応募動機と私の著書『それぞれの風景』（日本教文社発行）の感想文、それに面接です。北は北海道から東北、東京、京都、大分、宮崎、鹿児島島の学生たちです。面接には、その地の私の友人にお願いしました。面接官は医師だけでなく、新聞記者、小料理屋の大将など多彩な顔ぶれです。今後はあるグループが1人派遣できるだけの寄付金を集めてくださったら、そのグループに選抜していただくようにしたいとも考えています。選考が偏らないようにしたいからです。

「風に立つライオン」の新聞記事が出てから、20数社の放送局からテレビ番組にしたいとオファーがありました。しかし、全てお断りしました。風に立つライオンの主人公は「日本の医療改革」であり、その成果は次の次の次の世に期待しているからです。100年後に期待しています。私が好きな言葉に

1日を楽しむ人は花を活けよ

1年後を楽しむ人は花の種を植えよ

10年後を楽しむ人は木の苗を植えよ

100年後を楽しむ人は人を育てよ

という中国の格言があります。しっかりした体制が出来上がるまでは、映像にすることは控えたいと考えています。

さだまさしさんからのエール

もう1つ嬉しいことがありました。鹿児島で2月24日さだまさしさんの演奏会がありました。その前日の夜に食事をするようになりました。さださんは、「風に立つライオンを作るのに15年考え続け、ある時間いて15分で作りました。そして、今ではこの曲は自分の手から離れています。この曲を好きな医師が集まれば日本の医療も変わるかもしれない。風に立つライオンの取り組みはきっと骨太の医師を作るでしょう」と、話してくださいました。そして、「風に立つライオン」の色紙を特別に書いてくださいました。



学生は何を感じたか

- この偉大な自然の中で病いに向かい合えば
神様について ヒトについて 考えるものですね

「インド・カルカッタでの『風に立つライオンの旅』から帰国して、はや1週間。一日一日が当たり前過ぎていく。このギャップに戸惑っているのは、私だけではないだろう。混沌とした街を自分の足で歩き、見て、触れ、感じた毎日は、瞬間瞬間が新しい発見で満ち溢れていた。日中は、日本のかけらも感じさせないような街から新しい情報が目や耳へなだれ込み、夜はホテルのベッドで深い眠りに落ち、朝は興奮覚めやらない頭を抱えて街へ繰り出していた。それは、まるで精神が見えない糸で身体を引っ張っているかのようであった。ほんの1週間ほどではあったが、こんなカルカッタで得た経験を一度に伝えきることはできない」(宮崎医科大学3年 東 秀子)

「施設で出会った患者さんや子供たちの笑顔・手の温かさ・瞳の美しさを思い出す度、言いようのないほどの感謝の気持ち込み上げてきた。マザー・テレサは、『この世の最大の不幸は、貧しさや病ではなく、自分は誰からも必要とされていないと感じることだ』と言う。だから、ずっと路上で誰からも振り返られずに生きてきた施設の患者さんたちに、『私はあなたを必要としているのだ』という気持ちを表して接する。しかし、この旅の中で、その気持ちをもらって満たされていたのはむしろ私のほうだった」(順天堂大学医学部3年 倉繁 朋子)

「日本の現代医療の焦点は、さらに高度な技術・知識を必要とする難病や、長寿化に伴い増加した生活習慣病に移りつつありますが、インドの医療の第一歩は、栄養・衛生状態をよりよくしていくことにあると実感しました。そして、日本に生まれ、健康な体だけでなく、医学の教養まで与えてもらった自分の身を幸せに思い、それだからこそ果たすべき責任があるのではとも考えています」(北海道大学医学部3年 菅野 由岐子)

- 診療所に集まる人々は病気がけんど
少なくとも心は僕より健康なのですよ

「『風に立つライオンの旅』に参加して、どうしても言わなければな

らないことがある。それは、素晴らしい仲間との出会いである。共に働き、悩み、語り合った7人の友に心から感謝している。夜は毎晩のように語らっていた。初日はお決まりのように恋愛話であった。私の悩みもぶちまけた。宗教についても考えた。マザー・テレサの言葉の意味も探った。今回の旅が成功だったと言えるのは、彼、彼女らのお陰だといっても過言ではないだろう。私たちは研修に行かせてもらったのではなく、間違いない研修を自分たちで作り上げに行ったのだった。日本に帰ってきた今、私たちに求められていることは、この経験を独り占めにしないこと。自分の中で語り継ぎながら、社会へも貢献していこうとする姿勢だと思う。社会への貢献を考える際とても支えになっているマザー・テレサの言葉がある。『一隅を照らしなさい』という言葉だ」(順天堂大学医学部2年 堂園 桂香)

- 僕はやはり来てよかったと思っています
辛くないと言えば嘘になるけど しあわせです

小さな波紋が大きなうねりに

学生は全員アルジュンさんの自宅へ招待され、奥様の手料理をご馳走になり、全員が民族衣装をお土産にいただきました。お礼はまたインドに帰って来てくれることだとおっしゃっていただいたそうです。池に投げた小さな石が、徐々に波紋となり広がっている気がします。

- あなたや日本を捨てた訳ではなく
僕は「現在」を生きることに思い上がりたくないのです
空を切り裂いて落下する滝のように
僕はよどみない生命を生きたい
キリマンジャロの白い雪 それを支える紺碧の空
僕は風に向かって立つライオンでありたい

これからの医師を作るには多彩で多様な経験や指導者が必要です。ヴィタリテの読者の方々がその1人になってくださることを切にお願いしたいと思います。

日本音楽著作権協会 出 野誌第0202071・201号